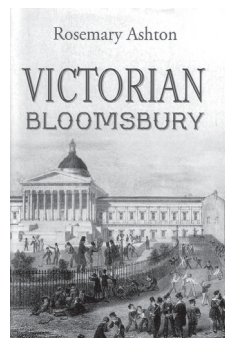


## 書 評

Rosemary Ashton, *Victorian Bloomsbury* (New Haven: Yale University Press, 2012)



中島 俊郎

文化史家ローズマリー・アシュトンの数多い著作に共通する特徴は、ある個人、場所なりが中心となり、外部からの異質な力がそこへ収斂されていき、ひとつの文化現象が形成されていくダイナミズムを描くところにある。近著 *142 Strand: A Radical Address in Victorian London* (2006) においては、ジョン・チャップマンと彼が経営する出版社が磁場となる。ディケンズ、サッカレー、J. S. ミル、カーライル、エマソン、H. スペンサー、T. H. ハックスレーらに混じりイタリア統一の社会運動家マッツイーニなどがこの出版社に集った。いかに急進思想がヴィクトリア朝社会と接していくかを垣間見る一方、集結した多様な知見を G. エリオットが編集する雑誌『ウェストミンスター・レビュー』を媒体にして自らの出版社から発信していく、知のネットワークの「現場」をつぶさに語る研究書になっている。

個人が何らかの寄与を果たして文化的集合体を形成していくといったアシュトンの文化史観は、対人関係に終始せず、その深い人間理解、個人と個人との人間関係を読み解く力に基づいている。初期の著作 *The German Idea: Four English Writers and the Reception of German Thought 1800–1860* (1980) は、ドイツの諸作家、とりわけゲーテが S. T. コールリッジ、G. エリオット、G. H. ルーイス、カーライルのなかで、どのように咀嚼され、イギリスの思想、文化形成に資したかを検討したものであった。本書はこうした方法論をもちいて、さらに大きなスケールに拡大して応用してみせ、ヴィクトリア朝の文化基盤がいかに形づくられていったかについて、錯綜した形態を腑分けして、明解に示そうとする野心作である。

1800年には荒涼としたブルームズベリーという地域が、ほぼ100年の間にロンドンの知的一大拠点へと変貌をとげていった。この地が文化の「実験所」となった事実は、「イギリス初の…」という形容辞を冠する施設、機関が数多いことから分る。たとえば宗派にとらわれず入学できるユニヴァーシティ・カレッジ（ロンドン大学）ができ、地理、現代語、建築、英文学などの科目が初めて講じられ、併設された医学部では麻酔を使用した初めての外科手術がなされた。女性の大学、医学校、職業訓練校などといった女性のための教育機関が初めて設けられたのも忘れてはなるまい。イギリスで初めての幼稚園が就学前の教育機関として開園されたのもここブルームズベリーであった。

その昔、ブルームズベリーにはスラムが所狭しとはびこっていた。荒地のうえに創設されたばかりのロンドン大学は「悪臭ただよう所」（‘Stinkomalee’）という文字どおり鼻がまがるような仇名で呼称された。ロバート・ピールが国立美術館をラッセル・スクエアに建てるようなことがあれば、所蔵品の価値は著しくそこなわれるであろう、とまで広言していたのは1825年のことであった。このようないわくつきの土地が「学間に必要な静寂や心の安らぎをやぶることがない場所」（『タイムズ』）へ変貌を遂げるのに70年もかからなかったのである。実験の場でなされた改革の速度はきわめて迅速であったと言うべきであろう。

改革の100年間のうちに300以上の教育、医学、宗教などにかかわる文化施設が林立するまでになった。だが、そうした事業にかかわったのは、人徳にあふれる名声の高い人々ばかりではなかった。文化史として本書の価値をあげているのは、逆に従来の記述からもれている奇人、変人ともいえるような人々をすくいあげ、ブルームズベリーの文化形成の一翼になっていた事実を指摘したことにあろう。メスメリズムを正当な医学行為だと主張して、「詐欺師」と糾弾されたロンドン大学教授ジョン・エリオットソンなどを切り捨てては文化のあるがままの姿を評価できないからである。実験の場には試行錯誤がつきものなのだ。

あまたの文化施設のうち、ロンドン大学と大英博物館というふたつの核が中心になりブルームズベリーという文化的楕円を形成していたといえよう。この二極をなす中心はたえず連動し、大きな文化的波動を発してい

たのである。図式化することを恐れずに言えば、ロンドン大学の創設には‘Mr Big-Wig’ことヘンリー・ブルームが大いに寄与したが、同時にブルームは大英博物館の有力な評議員のひとりでもあり、アンソニー・パニッツィーを大英図書館書籍部司書に推薦した。やがてパニッツィーはブリティッシュ・ライブラリーを、イギリスを代表する研究機関へと導いたのであった。ブルームズベリーが文化的拠点として、このような楕円の形をとりながらその文化活動が分野をたがえてみられたのは、きわめて特徴的なことと言わねばなるまい。

幼稚園の教諭を育成する女性の訓練校を立ちあげたマニア・グレー、幼稚園教育の必要を説いたエミリー・シレフ、マライア・グレー、ユニヴァーシティ・カレッジの動物学者ロバート・グラント、労働者に門戸を開いたF. D. モーリス、宗教家エドワード・アーヴィング、ジョン・ベア・カーデール、人文主義者エドワード・ビーズリー、フレデリック・ハリソン、医学誌『ランセット』編集者トマス・ウェークリー、ユニヴァーシティ・カレッジで外科手術をしていたボクサーあがりの医師ロバート・リストン、女性教育の教師エリザベス・ジェッサー・リード、アナ・スワンウィック、オクタヴィア・ヒル、メアリー・ウォード、ラッセル・スクエアに住み、多くの文化事業に関与したゲーテの友人でもある‘Old Crabb’ことヘンリー・クラブ・ロビンソンなどの名前をブルームズベリーの文化形成から逸することができない。

さらに文化的な面では新開地ともいえるこの地域を活性化したのは、異端的な人間が原動力となったのも時代をよくあらわしている。異血とも言うべき異分子が文化をいかに活性化するかという好見本がここにある。

さて、二極の一方であるロンドン大学が設立されたのは、いみじくもブルームやチャールズ・ナイトの有用知識普及協会が立ちあげられた時期と同じくしているという事実は決して偶然ではない。大学カリキュラム、教授法、とりわけ人文系の大学教育の実践の場において果たした成人教育運動の重要性が最近のヴィクトリア朝文化研究においても大いに検討されはじめた。

ここでヘンリー・モーリーのような革新的教育者に焦点を当てると、大衆への教育普及という側面がより理解できるであろう。では、教育者とし

てモーリーは、教育の現場でいかにして人心を強く掌握できたのであろうか。まず教育者に欠かせない説得力に注目してみると、生涯の折々にモーリーがその術を学んでいることに気づかされるのである。

1822年、医者の子息としてハットンガーデンで生を享けたモーリーは、1838年から48年まで、キングズ・カレッジで医学を修めたが、それ以前、10歳から12歳まで、ドイツのモラヴィア教会の学校で教育をうけている。そこではイギリスの教育の場で励行されていた鞭打ちが禁止されていた。どうやらモーリーの教育者としての原点はこの幼き日の学校教育で決定づけられたかのようだ。後年、教育現場における「体罰禁止」、「信仰の自由」を認めることこそが、「教育が進むしかるべき方向」だと信じて疑わなかった。1849年、モーリーはマンチェスター、リヴァプールで通学学校を開校し、両都市のユニテリアン派の人々から熱烈な支持をうけるまでになった。これら学校でモーリーは、意見を他人に的確に伝えることができる、新たな才能を自分のなかに見出した。同時期、英国でコレラが蔓延し、ジョン・フォスターが経営する発刊したばかりの『エグザミネー』紙に家庭衛生について、連載記事を依頼される。フォスターを通じて、小説家ディケンズから個人雑誌『ハウスホールド・ワーズ』の編集協力を委嘱され、ジャーナリストとしての道を歩み出す。だが、モーリーはジャーナリズムの世界に生息せずに、新たな世界を選択した。

1865年12月、モーリーはユニヴァーシティ・カレッジの英文学教授となったのである。古びたノートに頭をうずめて訥弁でたどたどしく語るのが大学講義の常態なのだが、モーリーは即興で流暢に教授できたため、説得力あふれる講義は絶大な人気を博した。英文学の専攻者数が、1865年には52名でしかなかったのに1872年には108名にもなり、1878年には191名という当初からみれば四倍弱もの受講者数にふくれあがった。ここで特記すべきは学生数の増加だけではない。1878年、女性学生に男性学生と差をつけず、学位を与える措置を講じた。オックスブリッジで女性に学位が全幅に認められたのが1920年、1947年であった事実を思いおこせば、モーリーの先取性を認めてもいいのではあるまいか。

ヴィクトリア朝人であったモーリーはじつに精力的であった。ユニヴァーシティ・カレッジでは週に20講義もこなし、『パンチ』誌からは

猛烈な講義ぶりを揶揄（‘Professor More and Morley’）されもした。

モーリーはユニヴァーシティ・カレッジだけにはとどまらず、1868年以降、成人教育の前身機関（Ladies’ Educational Association）にも身を投じていき、国中を東奔西走し、女性のみならず労働者の教育向上に尽力したのである。やがて成人教育（The University Extension Movement）は、ロンドン（1876年）、ケンブリッジ（1873年）、オックスフォード（1878年）、マンチェスター（1886年）などで開校されるようになる。ロンドン校では発足ほぼ20年後、1889年には107コースが開講され10,982名もの受講生が登録されていたのである。

1870年1月にモーリーが講じた講義録が残っている。それによれば、月曜日から木曜日までユニヴァーシティ・カレッジで講義して、木曜日の夜、ブラットフォードへ移動し、夜間講義と金曜日の午前中に職工学校の女工員への授業をこなし、金曜日にはヨークへ移動し、午後に講義を行い、翌土曜日は朝、ハダーズフィールドで最後の講義をやり終えて、ようやく土曜日の夜に帰宅するという強行スケジュールである。

こうした日常は教育に燃え立つ信念にかりたてられた者でないと、とうていこなせないであろう。モーリーが教育者として力をそそいだのは講義だけではない。古典作品の編纂、イギリス文学にかんする数多い研究書（『イギリスの作家たち』全11巻もこのなかに含まれる）などの執筆にも精力を惜しかなかった。

次に、ロンドン大学の改革者から大英博物館の改革者へと目を転じてみよう。イタリア独立をめぐりフランチェスコ四世の弾圧から逃れたパニッツィーは、亡命先のスイスで祖国から死刑宣告を受けた旨を内報され、1823年5月、イギリスへ逃れてくる。ロンドン到着後、亡命中のイタリア詩人、批評家ウゴー・フォスコロから芸術に理解が深い銀行家ウィリアム・ロスコーへの紹介状を得て、リヴァプールでイタリア語を教えて細々と生計を営むことになった。1826年、パニッツィーはヘンリー・ブルームの知遇を得て、新設されたロンドン大学ヘローマ法の専門家として応募する。当初、ローマ法の講座が開かれていなかったため、イタリア語、イタリア文学の教授として任命された。やがて1831年4月、大英博物館の司書補として雇用される。大法官であったブルームは大英図書館の3人

の委員のひとりであり、パニッツィーの人事に深く関与した。1837年まで、大学教授と司書職を兼任していたが、大英図書館で昇任（the Keeper of Printed Books）したのを契機に、大学教授を辞することにした。

サー・ハンス・スローンの蒐集品遺贈により、大英博物館は1753年に開設された。万人の知的意欲を満たす場にすべし、とその意図を謳っていた。そのため何人たりとも無料で入場でき、自由に鑑賞できる最初の国立博物館となった。運営の任は3人の代表委員にゆだねられ、実務運営としてさらに15人の委員がその役についていた。

1759年1月、大英博物館はスローンの遺言、国会の法案を遵守し、無料で万人に解放される場所となった。すぐに数々の問題が生じ、その諸問題を解決するには途方もない時間と労力が費やされたのである。万人に開放すると謳いながら、大英博物館は週末日曜日、閉館されていた。こうした不便さはとりわけ労働者からこの場所を訪れる機会を奪うこととなり、「万人に開かれた」場という公約は反故同然になっていた。入場も簡単ではなかった。入場券を得るのに何週間もかかり、いざ入手しても自由に鑑賞できなかった。さらに1810年まで看視員がそばにつき、見学もきわめて制限されていた。週末の土曜日が開館するようになったのは1879年のことである。そして日曜日の午後2時から開館するようになるのははるか後の1896年3月までまたなくてはならなかったのである。

大英博物館の改革が様々の社会改革と軌を一にしていることは、文化的事象として興味をひかれるところである。たとえば1820年代、ジョージ・バークベックやブルームが推進していた教育改革と歩調を合わせて、国会での議論もラッセル・スクエアのという場に集中していたのであった。

1840年代、1850年代を通じて大英博物館の開館時間をめぐる論争はかまびすしく、「いつ行っても閉まっている」所として『パンチ』で諷刺される始末であった。1855年3月、サー・ジョシュア・ウォームズリーは、「ロンドンの労働者の知的水準をあげるため」、日曜日の開館を国会で提案したが、大差でもって否決されている。「陰気で息がつかまるくらい退屈なロンドンの日曜日の宵」を描いた小説家ディケンズは、大英博物館が日曜日に閉館しているため、憂愁の色がおおうロンドンの様子を活写している——「過労の市民たちに慰安を与える場所はすべて門戸を閉ざし、絵画も

珍しい動植物も、古代世界の自然と人工の驚異も、すべて文明開化の世の厳格なタブーの犠牲となり、これでは大英博物館に陳列してある醜い南洋の異神像は故国へ帰ったかと思ったかもしれない』（『リトル・ドリット』）。「厳格なタブー」とは安息日をかたくなに守り、日曜日の閉館を意味しているのは自明であろう。

日曜日の開館が学ぶ機会を人々にも均等にもたらすものとして考え、その精神でもって大英図書館の改革を内部から断行しようとしたのがパニッツィーであった。「書籍に関するかぎり、裕福な者と同じように、貧しき者も向学心もち、知的追究のなか、同じ権威におもむき精緻な探究遂行をしてもらいたい。政府がこの点を束縛することなく、限りなき支援を貧しき者に与えるように私は切に望みたい」とは、学問こそ自由に、等しく学べるべきものである、とするパニッツィーの信条である。

ほぼ35年間の在職中、パニッツィーは矢継ぎ早に改革を打ち出し、手を休めることはなかった。まさに徒手空拳の戦いである。図書の目録化、出版された書籍の納本義務、図書館員の賃金の適正化、図書館の規模拡張などの難題をこなし、改革を着実にやり遂げていった。改革が進行するなかで軋轢が生じるのは自然の成り行きで、パニッツィーとカーライルの図書館の機能性をめぐる長い論争は、ロンドン・ライブラリーの開館をうながす一方、ラウンド・リーディング・ルーム建設を導いた。壮大な閲覧室は1852年1月、86,000ポンドの予算のもと建築されることになり、1857年5月2日、ようやく完成をみたのである。暖房、騒音遮断、鉄製の書棚などを完備した、パンテオンとほぼ同規模のドームのもと、巨大な読書室が出現したのであった。1865年10月、大英図書館を退職したパニッツィーは、ブルームズベリー・スクエアへ居を移し、1879年81歳で亡くなるまで静かな独身生活を送ったという（ブルームはブルームズベリーではなくメイフェアに居住した）。文化形成への地道な努力はこのような二極を中心にして、群生するほかの施設でも試行錯誤を繰り返しながら行なわれていたのである。

今日、この地域は20世紀初頭のブルームズベリーグループを連想させるが、ロンドン大学と大英博物館を中心としたヴィクトリア朝の文化活動があればこそ、その文化現象が派生してきたのだと理解できよう。